カムラの対の竜 ―カムラVSプレデター

薫鮫かおルみずち

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

百竜夜行の淵源たる対の古龍を倒してから１年半、念願の祝言を目前に控えた愛弟子とウツシ教官が、各地でハンターを狩り続けるプレデターの脅威に立ち向かうお話。恋愛＆バトルものです。（全５章）

※モンハンライズと映画「プレデター」シリーズのクロスオーバーです。

※全年齢ではありますが映画「プレデター」シリーズを想定した暴力・流血・人体破壊の表現があります。

※モンハン世界のアイテムやカムラの里の対して設定を膨らませています。

※主人公の女ハンターはデフォルトハンターをイメージしています。また、主人公は愛弟子・猛き焔・乙女・戦乙女と呼ばれます。

※２０２１／９／１２　ｐｉｃｔＳＱＵＡＲＥでのウツハンオンリーイベント『愛弟子といっしょ』にて参加作品としてｐｉｘｉｖ小説に掲載した作品です。

ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｐｉｘｉｖ．ｎｅｔ／ｎｏｖｅｌ／ｓｅｒｉｅｓ／７８１８９５０

目次

第一章　傘屋ヒナミの困惑 ―― 1
第二章　砂原からの帰還 ―― 8
第三章　砂原での痕跡 ―― 11
第四章　水没林の捕食者 ―― 24
終章　カムラの対の竜 ―― 36

第一章　傘屋ヒナミの困惑

カムラの里の大門と里を繋ぐ橋の上の傘屋と言えば私ヒナミのことである。

雨傘に日除け傘、仕込み傘に盾の傘、旅のお土産としても中々の評判で意外にも一定の売上がある。里を訪れた駆け出しの若い商人が里から出る際にカゲロウさんが持つ傘と似たものを買っていくのも珍しくはない。

門前の傘屋は親子代々と引き継がれてきたもので、只者ではない傘までも店頭に出せば買われ続けているのも代々変わらないらしく、それはもう傘もカムラの里のちょっとした特産品なのでは?と胸を張りたい。

まぁ仕込みどころか傘そのままの大剣をハモンさん達がこしらえたのはやり過ぎだと思います。

傘を店先に並べ、日除け代わりにその日のオススメの傘を広げて、さり気ない視線の死角を作ったら里守・傘屋のヒナミの一日が始まる。

カムラの里の入り口となる大門に一番近い所で店を構えるヒナミは里の有事の際に門を閉じる権限を預かる里守である。

たたら場の周りにある高い煙突から飛竜避けの煙を焚いているが、アオアシラ等の牙獣種が稀に突っ込んで来ないとは言い切れない。ハンターがいても狩場と違い町中の戦闘は避けたいですから。

二年前に百竜夜行が頻発する事態となった。里守一同と里守ではない住人とカムラを気に入ってくれた余所のハンター、そして猛き焔つまり愛弟子が一丸となり幾度も幾度も砦で踏ん張り凌いでくれたおかげで私は、門を担う私は砦から引き上げる人を切り捨てて門を閉じるという選択をしないで済んだ。

長い長いカムラの里の歴史は、何十年か幾たびと起きる百竜夜行による壊滅と復興と要撃の歴史でもある。我が家は先祖代々、砦を突破された時の最後の防衛戦である里の門を担ってきた専守防衛の里守で、門を閉じることの意味と責任の重さを受け継いできた。

あの頃私は、百竜夜行を迎え撃つべく砦へ向かう者に例え里長であろうが軽口を叩いて送り出しながらも、皆の無事を祈り誰一人欠けること無きよう帰還を祈り門を閉じる伝令が飛んでこないことを祈り、また砦への道を外れたモンスター共が門に里中に向かってこないことを祈り、緊張で売り物の傘を握り壊す日々を過ごした。

橋を渡りきった里の手前側に傷痍者看護の為に陣を張っていたゼンチ先生が「ヒナミ!毎度毎度そんな強い力で傘を握っていたらお前の手が壊れるのニャ。余計な患者を増やすんじゃニャイッ!!」と猫パンチを手に喰らわせてきたのは数え切れない。私は今でも肉球の感触と共にそれを思い出すとフフっと笑ってしまう。

「おはようございます、ヒナミさん。」
「あらおはよう、今日は休みかしら『花嫁さん』」
「んもー!朝っぱらからくすぐったい返しはやめてくださいー!」
「しつこくしてくる輩に『大切な許婚がいるので』って甘酸っぱい返り討ちする期間をおかわり出来たんだから良かったじゃない。来週からは『新婚生活の邪魔しないでください』って二年ぐらい続けなさいな。」

顔を耳まで朱に染め、照れの感情が振り切れた『花嫁さん』は頬っぺたを膨らまし唇をワナワナもにょもにょさせてヒナミをはたこうとする。
「待って待って!本気でそう思ってるけど、からかうつもりは無いんだって!」

売り物の頑丈な傘でガードしながらヒナミは花嫁をなだめた。
「たっ…タチが悪いです…それ…」

取り繕っていないがさほど宥めになっていないヒナミの言葉に花嫁は振りかぶった腕を下げた。

まぁまぁと、藍や紫色のカムラの花と手裏剣の紋をあしらった白い浴衣を纏う乙女をヒナミは隣に座らせる。傘屋の店番は今から二人になりました。

店番に加わった乙女は翌週に祝言を上げる予定の里の英雄、猛き焔

である。
　五〇年ぶりにカムラの里を襲った百竜夜行は、二年前に再発すると過去にない頻度で起きたが、一人のハンターと里守達によって防がれた。二年前に乙女がハンターとして独り立ちする時と同じくして百竜夜行の兆候が現れ、ハンターとして心技体を成長するのに合わせるかの様に災禍も徐々に手強いものになっていった。五〇年前の百竜夜行にて里を破壊し尽くしたマガイマガドを倒すも古龍が現れ災禍は続く。狩り場より奥地に住む竜までも惑わし、百竜夜行に巻き込む原因が互いを求めあう対の古龍にあると突き止めた里を背に、猛き焔は百竜ノ淵源たる古龍を激闘の末に降した。
　長い年月をかけて土地にそういう癖がついてしまったと思っていいのだろうか、それからも半年に一度程度で百竜夜行が起きる様になったがかつての様な禍々しさはなく、むしろ一度に大量の素材が手に入る豊穣と表裏一体の自然現象になった。
　新しく他所から来るハンター達には「呪われてません？移住した方がよくないですか？」と嘯く者がいるが、カムラの里には全く違う呪いがある。
「おはよう！愛弟子！」
　音もなく眼前に現れた美丈夫は快活に大声で朝の挨拶を乙女に投げかける。
　こいつよ、こいつ。猛き焔の名を冠した里の英雄を一流のハンターに育て上げたウツシ教官の呼びかけが呪いなのである。
　ウツシはハンターであった両親を幼い頃に無くした乙女を引き取り、人としてハンターとして愛弟子を導き育てた。普段は仲睦まじく微笑ましい様子を振りまき、訓練となれば厳しい試練を課す師匠と失敗しても挫けず喰らい付く弟子を里の民は見守ってきた。人の恋路や甘酸っぱい雰囲気を悟ってはひとりで味わう趣味があるヒナミは二人を見守っているうちに師弟の絆と家族の情とは少し違う気持ちの矢印を嗅ぎ取った。
　ヒナミが違和感を覚えたのは弟子がハンターとして独り立ちしマガイマガドを倒した頃のこと。独り立ちの一環で一人暮らしを始め

ていた弟子を往来や屋根の上から大きな声で「愛弟子！」と呼びかけるようになり、幼き頃から彼女の名を呼んでいた里の民の耳は繰り返される「愛弟子！」の呼びかけで塗りつぶされ、大抵の彼女を名で呼んでいた者も「愛弟子」と彼女を呼ぶようになってしまった。

一体いつから彼女に恋慕の情を抱いたのかは知らないけれど、一見気さくで爽やかな青年による、彼女の名を独り占めする呼び掛けはカムラを覆う呪いみたいなものだとヒナミは思った。うっかりウツシの前で彼女の名を口にすると視線の苦無が飛んでくる。これで愛弟子が違う人を好きになったらどうしてたのよ…。

しかし愛弟子については、ウツシが闘技大会の受付業務中を他所から来た女ハンターに群がられて邪魔されているのを目にしては無の表情になったり、腕を無理やり絡まれているのを目撃してしは涙目でミノトさんからクエストの受注する愛弟子の様子を、川を望む茶屋の席から度々目撃しているとアヤメさんから聞いているので心配には及ばなかった。

一見さわやかで人懐こいが狼雷竜の如き執着心と激情を秘めた青年と、一見可憐であるがモンスターに敗れても「絶対に仕留めてやる！」と黒い瞳に炎たぎらせ鼻血を拭いながら再度モンスターに突進する苛烈な乙女の組み合わせも味わい深い、とヒナミは呪いを受け入れ二人を見守ることにした。

強過ぎる恋慕と独占欲を覆い隠せていない癖に父娘にも兄妹にも見える家族同然の関係性と年の差に尻込みし、師匠としては真面目に己の培った狩猟と戦闘の技術を叩き込んで里一番のツワモノとして育て上げた愛弟子に対して百竜夜行と古龍との過酷な闘いの前線に立つ役割を背負わせてしまったと気負い始めたウツシの手を、怨虎竜の如く逃すまいと掴んだのは愛弟子だった。

淵源の対の古龍との最終決戦の折、愛弟子は師匠に想いを伝えると里の期待と悲願と一緒に恋い慕う男の全ての情を勝手に背負って対の古龍を見事討ち果たした。ウツシとは逆に人前で滅多に恋心の片鱗を見せなかった彼女は、戦いの場で恋心を鬼火に変えて纏う戦乙女だったのである。まさに猛き焔。

二年前、愛弟子がハンターになり災禍としての百竜夜行が終わるまで約半年。

カムラの里と翡葉の砦が立て直され、近隣との交流が復活し里に賑わいが戻った半年間、互いに仕事が忙しくとも師弟は恋人として歩みを重ね、稀に人前で甘酸っぱい雰囲気を醸し出してはそれをヒナミは満足げに吸い込んだ。

一年前、師弟であり恋人である二人は夫婦になりたいと婚礼の許しを里長フゲンに申し出た。強い男女なら早く番って子を産み早く次の世代を…と婚礼を急がせる意見もあったが、前回の百竜夜行が五〇年前で発生の周期が読めないこと、今回以降から古龍が狩り場に気軽に出没するようになったことを鑑みて、ハンターと里守の育成と里の戦力増強に注力する方が手っ取り早いという結論に至った。

また、生まれた頃から愛弟子を見守ってきたヒノトとミノトや里の若い世代は、年端もいかぬ乙女が百竜夜行のせいで年相応の青春を堪能できず、駆け出しのハンターとしては早くに過酷な戦いを強いられ生き急がせてしまったことを憂う者も多く、それらの声をまとめたフゲンは半年後の吉日を選んで祝言を挙げると宣言した。

そして、里の英雄と次期里長と謳われる実力を持つ男の祝言を控えた半年前のこと。タタラ場の製鉄技術と豊かな資源に目を付けていた賊が祝言の噂を聞きつけて、宴の隙をつこうと動き始めた。ウツシ率いる偵察部隊が察知したが、己の実力を見誤った賊共は破れかぶれに里に突入するも竜と渡り合う里守達の前には歯が立たず、里の狼雷竜と猛き焔によって屠られた。

ハレの日を目前に里の民の前で賊を殺めてしまい、自身も人の血を浴びたことをひどく恥じた乙女は己と里の禊の時間が欲しいと涙ながらに訴えて、皆が気にせず予定通りやる気満々だった祝言を半年延期させてしまった。

スズカリとセンナミ夫妻の仲睦まじさも、コミツちゃんとセイハク君のもどかしい微笑ましさも美味しく見守り味わっていたヒナミは、楽しみにしていた新婚の甘酸っぱさに待てをかけられ残念がったが、恋人達が互いに許婚と呼び合う日々が増えたと喜ぶことにした。

…相思相愛の二人がやや照れながら許婚と口にする様子はとてもいいものです。
相思相愛かつ愛しい乙女との祝言を目前に控えてもなお呪いの挨拶を続けるウツシに、ヒナミは先程と同じように挨拶を返す。
「あらおはよう、今日は休みじゃないのかしら『花婿さん』」
「いやぁ、朝からくすぐったい返しはやめてくださいよ、ヒナミさん！」
花婿は花嫁とほぼ同じ言葉で照れた。
「まだまだくすぐっていくわよ～。お二人さん覚悟なさい？」
「うわぁ、これは思わぬ強敵だ。」
「カムラの門前に手強き傘鳥あり、ですね。」
恋人達は声を笑いながら降参する。
「あ、そうだ。祝言のお祝いに夫婦揃いの傘を贈りたいんだけど好みがあるなら教えて。出来れば早く、早くね。」
急かす言葉の中にヒナミが大門の外を意識していることを察した狼雷竜と猛き焔は、竜を前に身構える表情で「わかりました、早めにお返事しますね。」と声だけを朗らかに揃えた。
ヒナミはずっと見守り続けていた二人の祝言を祝いたいとがむしゃらに願った。
四か月前からカムラの里にも少しずつ積もり始めた、血の混ざった不吉な空気を全て気のせいにして目前に控えた二人の門出を祝いたかった。
四か月ほど前から里の桜が散ってしまうのではないかと心配するぐらいに里の気温が上がった。ハンターの話によれば大社跡は里と同じくらいで、寒冷群島は寒さが厳しくなり、他の狩り場は暑くなったという。
気候を司る新たな古龍の出現を心配したがモンスター達に兆候は現れず、代わりに奇妙な旅人をヒナミは迎えるようになった。
素材や修行や武功を求めて里を訪れるハンターが減り、代わりに何かに怯えながらも武器を持つことを拒む旅人が里に流れ着く頻度が少しずつ増えてきた。

ひとり、またひとりと皆一様に武器を持たず何かにひどく怯え、着の身着のままで身を竦めてカムラの里に逃げてきた逃れ者達にヒナミは困惑した。
「森が襲ってきた。」「見えない奴に村の男達が殺された。」「武器を持っているとやられる。」「森が死んだ奴らの声で話しかけてくる」「一番強い奴が獲物だ。」「森がハンターを狩っている。」…と、ハンターを狩る見えないハンターの存在を示唆するにわかに信じがたい内容を震えながら語り、ある者は里に留まり、またある者は隠れる場所を探しにカムラを後にした。
百竜夜行の脅威と全く違う何かが起きている。そして気候の異変はカムラの里だけのものではなく、モンスターや古龍は関係していないらしい。
十日前、大門をくぐると目の前にいるヒナミの顔を見た途端、泣き崩れた男がいた。ハンターとして鍛えたであろう大きな体を震わせすすり泣いている。丸腰で獣や竜に襲われる方がマシだ…あんな惨たらしい死に様は嫌だ…と武器を捨て鍛えた体を縮こませ震える男は見えない視線に怯えて一歩も動けない。
「とっても疲れているんだね。奥に進めば茶屋や宿もあるから、お団子食べてお茶でも飲んで少し休みな。ほら傘も貸してあげるから、これなら怖い視線からも隠れるよ。」
ヒナミは大きめの傘を広げ大男に握らせると何とか立ち上がらせた。しかし見てきた惨劇に心が折れていた男はこれ以上足を踏み出すことが出来ず、一本の傘を困惑した表情のヒナミと二人で握り一歩また一歩…と、付き添われる形で茶屋に連れていかれたのだった。
そして先週、ついにユクモ村とカムラの里の間で襲われたという重症のハンターが運び込まれた。
ハンターを狩るハンターの脅威が少しずつカムラの里に近付いている。

第二章　砂原からの帰還

「こりゃあどういうことだ。」
「コイツがクエストで依頼されたティガレックスでいいのか？」
「やっこさん、手練れが集まって仕留めたとしてもこんなキレイに倒せるもんかね？」
「どこのハンターでもこんな倒し方は出来ないわ。剥ぎ取りはちょっと考えましょう。」
　多少は涼しい夜のうちに標的を全力で倒して気温が上がり始めるだろう早朝前には退散する予定だったパーティーは、目の前に横たわる頭の無い轟竜をどうしていいものかと困り、血の臭いに誘われた大小のモンスターに鉢合わせするのを避ける為、ひと先ず間近のサブキャンプに向かった。
　四人はそれぞれ一人で請け負うには面倒そうな依頼を受ける為に集会所で即席パーティーを組んでからまぁまぁ気が合い、集会所で四人並んでうさ団子をニコニコと頬張る程には仲が良かった。
　今回の依頼内容は砂原でのティガレックス一匹の狩猟であったが標的を探していたら先刻の轟竜の異様な死体を発見した為、こうして四人は崩れた遺跡の壁に囲まれたサブキャンプのテントの外で焚火を囲み出発から一切消費していないアイテムポーチを無駄に点検している。
「ラージャンをうっかり起こしてあのえげつないビームで頭を焼かれたんじゃねぇ？」
「ビーム攻撃を喰らったんなら断面は焦げてるだろうからあんなに血を流してないわ。」
「いくら鋭い爪を持つドデカいモンスターがいたとして、首以外は手つかずってあるもんかね。首と片足の切り口以外に体にやりあったような新しい痕が無い。」
「ハンターが片足をスッパリ切り飛ばして歩けなくして首を刎ねた…んだろうが切り口といい色々とおかしい。」
　戦ってすらいない轟竜の死体から剥ぎ取りを行うのも、自分達で倒

したことにして依頼主に報告するのも躊躇うほど四人は人が良かった。念のため首無し轟竜の死体の写真を撮りに戻り、半刻だけ他に生きている轟竜がいないか探して、見つからなかったら件の写真を見せて依頼主とギルドに報告しようとの方向に意見をまとめる。
「サブキャンプに来てみたが、そもそもメインキャンプからやっこさんを見つけるまでケストドン一匹見ねえし、やっこさんの死肉を狙って適当なモンスターに出くわすかと身構えてりゃ静かなもんで、真夜中の遠足かってぇの。」
リーダー格の男の胸元に赤い3つの点が浮かび上がる。
「ハハハッ違えね…え？」
三角形に並んだ赤い点が左胸にスッと動く。
ライトボウガンの使い手二人が照準を合わせる動きに似ていると無意識に悟る頃には赤い点はリーダーの額に移動していた。
ライトボウガン使いの女が短く謝りながらリーダーを蹴り飛ばした刹那、白く細い閃光がリーダーの座っていた位置の奥、テント横の遺跡の壁を直撃した。砕かれるように貫通した壁の穴に目を向けたら閃光が今度は違う角度から飛んできて焚火をうち消した。急な暗闇に飲まれ見たことのない攻撃への驚きと恐怖を振り払うかのようにテントを背に武器を構える…が、ギャアアッと笛使いの男の悲鳴が聞こえた。
「おい！笛の！」
暗闇に眼が慣れて星空とヒトダマドリや虫の灯りで周りがそれなりに見えるようになったが、目に入ったのはおびただしい血飛沫に染まった遺跡の壁と狩猟笛だけだった。
暗闇に潜む奴らとも音もなく飛んでくる奴らと一味も二味も違う、そしてこいつはどうやら戦いの流れを作り俺達を狙っている。そもそもこれは戦いなのか？手口は違うがきっと首無し轟竜をこしらえた奴に違いない。もしや噂の奴か？カカカカカカルと唸り声が聞こえる気がする。そんなに近くにいるのか？三人は目を見開き歯を食いしばり武器を握る手に力を込める。
ふいに景色の一部が小さく波打つようにヒトの形に盛り上がり、赤

い光の点を伴って動いた。
「「「いたぞぉぉぉぉ！いたぞぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」」」
　絶叫と乱射が始まる。漸裂弾リロード電撃弾リロード貫通水冷弾リロード散弾リロード徹甲榴弾リロード竜撃弾リロード麻痺弾リロード拡散弾リロード種類も属性も考えず持てる弾を砂原にぶち込み続けたが手応えがわからない。三人とも残弾が通常弾しかないことをそれぞれ射撃音で悟った頃、ひゅっと空を斬る音がライトボウガンの女の胸を刺し、勢い衰えぬまま女を遺跡の壁の頭一つ高い所に縫い付けた。ライトボウガンの男はまるで竜の尻尾に横から殴られたように打ち飛ばされ、全身を焼くような打撃の痛みと折れた骨が身を刺す痛みに意識を沈めた。リーダーは虚空へ向けて再度ヘヴィボウガンを構えたがその虚空に首を掴まれた。
　ヘヴィボウガンが地面に落ちた音と悲鳴が重なり、引きずる音と肉を引き裂く音がサブキャンプに響くと、静寂と夜明けがカムラの砂原に訪れた。

第三章　砂原での痕跡

「うあっつい!!」
「あっつい!何これ、マジあっつい。」
「最近ずっと暑かったけど今日もっとあっつい!!」
　自分でもオーバーリアクションになっているのは自覚しているけど「うあぁぁぁ」と悪態をつくのが止まらない。
　砂原のスタート地点であるメインキャンプは、大きな岩山の真ん中に乾いた風とかつてあったと思われる大河が年月をかけて削り取ってできた風通しの良い広い風穴を、太陽がどの時間にあっても必ず日陰の下にいられるよう古くからハンターや職人達が掘削して更に広く拓いた場所だ。普段はうさ団子の恩恵もあるが日光が肌を照るようなチリチリとした熱さを感じる程度で日陰にいれば涼しくはなくても過ごしやすい…はずだった。
「いやこれ溶岩洞より暑い、日陰なのにあっ…って!」
　両太ももに小さな獣脚の蹴りを受けて尻餅をついた。蹴られた感触の大きさと一致する後ろ足の持ち主であるオトモ２匹の呆れた目線に「あ、はい、ごめんなさい。気絶してませんもう大丈夫です。」と冷静さを取り戻す。
「ご主人、いくら暑いからってクーラードリンクも飲まずに騒ぎ過ぎると任務の前に倒れるニャ。早く飲んでのんきな頭を冷やすニャ。」
　他の地域や国では暑さによるスタミナの減少を防ぐ為にクーラードリンクを飲むけれど、カムラの里ではうさ団子の中に著しい寒暖差に体が負けないような成分が入っているらしく、外部から来たハンターにクーラードリンクの存在を聞かされるまでは実はそのような物が必要だとは知らなかった。
「ごめんごめん取り乱し過ぎたね。まずモンスターは徹底的に無視する。砂原を左右半分と捉えて最初に右側の砂漠まで捜索調査し、左の砂漠に移動したらこのメインキャンプに向かって左半分を捜索する。これで行こう。」
　はじまりは四か月ほど前、寒冷群島を除く狩り場の気温が上がり始

めた。否、寒冷群島は寒さが厳しくなり――すなわち狩り場の気候の寒暖差がより顕著になった。大社跡は植物の採取に支障のない範囲の暑さではあったけれども、すわ気候を司る新たな古龍の襲来かと里が構えていたらしばらくの後、奇妙な旅人が里に流れ着いた。

古くからカムラの里を幾度も襲った百竜夜行を里守一丸となって凌ぎ、原因となった対の古龍を倒してから二年近く経った。それから小規模な百竜夜行が起きることはあってもヒノエさんとミノトさんに共鳴が起きることは無く、近隣の大型モンスターや古龍の動向に妙な兆候は見られなない。次々と駆け込んでくる奇妙な旅人によって異変は里だけのものではないこと、そして竜や古龍が原因ではない「らしい」ことがわかった。

旅人は他の地域のハンターであったり商人であったりしたが奇妙なことに武器を持たず、一様に何かにひどく怯えており、また何らかの事象からの生き残りである。

「森が襲ってきた。」「護衛のハンターが狙われた。」「近くを根城にしていた賊の根城が血の海だった。」「武器を持っていた奴らみんなやられた。」「女子供は襲わない。」「森が死んだ奴らの声で話しかけてくる」「どんなに手先が器用なモンスターでも死体を丁寧に吊らない。」「一番強い奴が獲物だ。」「あれはハンターを狩るハンターだ。」

丸腰だと獣や竜に襲われた時に命を落とすことだってあるのに、獣や竜ではない何者かに狙われるのを恐れて武器を捨て鍛えた体を隠し逃げ延びてきたのだった。彼らは旅人ではなく逃れ者だったのである。逃れ者が新たに流れ着く都度、何処から逃れてきたかを聞く都度にハンターを狩る者はカムラの里に近づいて来ていることがわかった。

そして先週、ついにユクモ村と里の間で襲われたという重症の女ハンターが運び込まれ、同時に狩り場であらゆる小型モンスターが一斉に姿を隠した。

「チクショウ！女子供は襲わないなんて話だったのに！女でもハンターってバレたら…武器を持って戦おうってんならこのザマさ!!」

死の縁でなお足を切り落とされた痛みと恐怖で錯乱する女ハン

ターを鎮めゼンチ先生や医術に心得のある者総出で必死の措置と看病を施して一命を取り留めた二日前、ついにカムラの里で事件は起きた。二日前ティガレックスの狩猟を受注し夜に出発した四人組が消息を絶ったのである。

ギルドは土地勘とあらゆるモンスターに対する立ち回りを会得している私に四人組の捜索と砂原の調査を命じ、また武器だけは置いていく指示を出した。相手はモドリ玉を使う余地すら与えない俊敏さを兼ね備えているらしく、万が一の為に戦う者と悟られぬよう生きた情報を絶対に持ち帰ることを優先する為の苦悩の策である。

一杯目のクーラードリンクを飲み干してガルグの背に乗り駆け出した。

第一にクーラードリンクが効いている時間を効率的に使いスタミナの消耗を抑える。第二にオトモ達と離れる単独行動を避けたい。第三に地下洞は陰になっている分地上より幾分かは涼しいだろうとの予測。これらの点を踏まえて最初に砂原の地上だけを探し、水辺などの崖下の窪地には出来るだけ降りずに目視することにした。

ウツシさん、ウツシ教官は教官職の傍ら諜報の仕事も担っているけど、捜索や偵察はどんな感じにやっているのだろう。心得とか立ち回りとか注意すべき点とか隠密としての立ち振る舞いを日頃から聞いておくべきだった。

淵源たる対の古龍を倒すべく龍宮砦跡に乗り込んだ時、私は小舟で送り届けてくれたウツシ教官に家族として子弟としてのお礼と親愛の言葉を告げ、さらに心に秘めるつもりでいた恋心までもを教官にあらゆる言の葉を尽くして教官に伝えた。ウツシ教官は私の全ての想いを受け止め、また彼もあらゆる言の葉を尽くし私に抱えていた家族と弟子と、女性として思い慕う気持ちを伝えてくれた。ウツシ教官の全ての想いを受け取った私は対の古龍を討ち果たし、ウツシ教官の対となった。

やがて百竜夜行の脅威が収まり里が復興した後、里長に夫婦になりたいと申し出て晴れて許婚の間柄になった私達は狩りに出掛けたり一緒に依頼を受けるようになった。里周辺の偵察任務を手伝う機会

もあったけど、里のよく知る狩り場とは言え今回は勝手が違う。ひとりでぶっつけ本番の偵察任務に当たることになってしまったのだ。
「愛弟子なら大丈夫だよ！モンスターと向き合う時と同じさ。弱点や疲れの溜まっている箇所を窺う、致命傷に繋がる特殊攻撃の兆候を覚えて回避する。もちろん反撃しやすいように見計らってだ。元々しっかり出来ている状況の把握と最適解の身のこなしを探すことだけに集中すればいい。愛弟子はカンがいいからきっと出来るよ！」
教官は訓練生や駆け出しのハンターの頃とも変わらない褒め殺し混じりの励ましと共に私を送り出した。
右側の水場と奥の砂漠の間にある丸い壁に囲まれたサブキャンプに着く直前、一杯目のクーラードリンクの効き目が切れた。そして一緒に飲んだオトモ達もほぼ同時にドリンクの効き目が切れたことに妙に感心した。体格も体の構造も違うだろうにドリンクはきっかり時間制なのだ。一旦サブキャンプに寄ってドリンクを飲もうかと思ったけど、一歩も動かずともスタミナを削り落としてくる暑さに危機を覚えたのでその場で二杯目のクーラードリンクをおかわりしてサブキャンプにはポーチの道具の入れ替えにだけ寄った。
奥の砂漠に入りガルグはゆるやかに大きく蛇行しながら砂漠の中心を進む。ディアブロスの餌場のサボテン群はこの暑さでもかろうじて逞しく生存している。狩りで大いに活用している閃光羽虫の群れもいつもと同じ宙をまばゆく飛んでいる。小さな生き物は存外無事のようだ。竜との戦いも気にせず足元の砂漠を自由に泳ぎ回るデルクスは砂漠の崖のキワで背びれだけを出して縮こまった群れを作っていた。
砂の橋を渡り折り返し地点となる左側の砂漠に入る。左の砂漠にも人の痕跡はなく不審な点も見付からない。そろそろクーラードリンクの効き目が切れる頃合いなので、砂漠を抜けて左手の台地に駆け上ってから三杯目のドリンクを飲み干して再び高台からの哨戒に戻る。
朽ちた遺跡群に囲まれたキャンプのある台地の手前の水辺で遠目にティガレックスの死体を確認したので、捜索対象のパーティーが受

注していた轟竜はこれかしら？と近づいてみる。連日の酷暑の中で損傷箇所から傷みはじめた轟竜を見下ろして初めて全身の神経と筋肉に緊張が走った。

周囲を警戒しながら片足を切り落とされ頭が無い轟竜の検分を始める。写真を撮りながら首の切断面を観察してみると頭をモンスターに喰い千切られたような歯の形跡は無く、一撃二撃といかなくても鋭利な刃物で切り落とされていたことが分かった。首の切断面の血だまりからある方向に血を引きずった跡が伸びていたが、途中で何らかの血止めを施したのか跡は途絶えている。なお、切り離された足は死体の傍らに転がっていた。

こんなことが出来る奴、私は知らない。デカい図体のくせに小回りが利いて咆哮と地面を掘り起こして飛ばしては簡単に近寄らせない轟竜を、ほぼ無傷で仕留める奴なんて私は知らない。足を刎ねたのはおそらく足止めの為だろう、しかし足には他に攻撃を受けた痕が無い。どんなハンターでもこぞって狙う尻尾はきれいに繋がっており、頭を持っていかれた以外には剥ぎ取りの形跡が一切無い。食料として大なり小なり啄まられた箇所もない。そいつにとって必要なのは頭だけだったのかも知れないけど、不要な物でも何でも一旦持ち帰り素材として取っておくか売り払うハンターとは違う行動原理を持つ奴ということだけはわかった。

風で消えかけている足跡が四人分あったけど、多分この轟竜を仕留めたのは彼らではない。それに私とウツシ教官の二人で翔蟲とアイテムを駆使して縛り上げたとしてもこのような仕上がりにならないはずだ。

途切れた血痕の先にキャンプがある。風に幽かに血の臭いを感じてオトモ達を見やると少し毛を逆立てていた。あのキャンプに捜索の成果がきっとある。

崩れた遺跡の中、より血の臭いの濃い方向に見慣れたキャンプのテントが見えてきた。

距離を取りながらテントの正面へと回り込むと交戦した後と思わしきおびただしい銃弾跡と壁や床を染めた血だまりが複数目に入っ

た。鼻の利くオトモ、特にガルグが血の臭いで参っているので二匹に次のクーラードリンクを渡し崖のきわにある壁の陰で休んでもらう。
倒された松明の支柱をひとつ掴みテントの布を、外側から一周しながら叩いてみた。
テントの布も血で汚れているからどうせ張り直しないとね、と思いながら入口の幕を思いっ切り引き剥がしてみた。
…ヒッ
引き攣るように息を吸い込むような音が聞こえたので、テントの入口に背を付けて顔だけ向けて内部を覗いた。
囲炉裏の上に震えながら丸くうずくまっている男がいた。
「あなたがティガレックスの狩猟を受注した人ですか？他の仲間はど」
「仲間！ななな仲間！やややられちまった。空がうううう打ってきた、空がやられたみんなやられぢまった。狩りだ俺達は狩られた！ああ痛ぇようう。あいつ！あいつだ！森じゃねぇあいつはぅ空だ痛い痛い痛い！」
仲間という単語に反応した男は堰を切ったかのようにまくし立てた。テントの中も外も危険性は変わらない気がしたので男をテントの外に引っ張り出す。全身を強く打ったのか左腕が関節と逆方向曲がっており肋骨が何本か骨盤も折れている様子で、火傷は囲炉裏の上に乗った時のものだろうか、その大怪我と痛みで二日間よく持ったものだ。
落ち着かせたいのと会話するぐらいの力を引き出したくて回復薬と元気ドリンコを飲ませてみる。骨折やひどい打撲の治療は出来ないけど炎症を多少緩和できないものかと、思い付きで薬草と霜降り草とネムリ草を雑にすりつぶしたものを患部に巻き付けてみた。熱があるのに気が付いたアイルーが濡らした布切れで顔の汗を拭う。辺りの血の臭いがきついだろうにあまりの男の狼狽を心配したのかガルグもやってきた。クーラードリンクも無理やり飲まされて渇きを癒した男はポツリポツリと口を開く。
「俺達はティガレックスの狩猟を受注して夜の早いうちに狩ろうと決

めて砂原に来た。」
「道中ジャギィ一匹姿を現さないうちに俺達はティガレックスの死体を見付けた。」
　――首のない、無傷のティガレックスですね？
「お前もあれ見たんだな？ぅおかしいだろ？頭だけ無くて他は無傷の竜なんて。どこのハンターだって一人だろうがパーティーだろうが報酬が増えるから尻尾を狙うし、弱らせたくて足腰や背中も狙う。でもやつはそうしなかった。頭だけを欲しがった。何故か分かるか？」
「報酬は欲しいけどあんな異様な死体を目にしたら誰だって考える時間は欲しくなる。」
　――だからこのキャンプに来たのですか？
「ああ、そうさ。俺達は別にのんびりするつもりは無かった。ただ話し合う為にここに来たんだ。そうしたらまずリーダーが狙われた。」
　男はどうにか持ち上げた右腕でテント横の壁の穴を指し示した。
　――撃たれたんですか？あの穴は砲撃…？
「その時はリーダーは無事だったけど次に焚火を狙われた。…俺達の視覚を奪った。」
「真っ暗闇の中、笛使いがやられた。」
「暗闇に少し目が慣れて悲鳴が聞こえた方を見たら、辺りそこらに血がべっとりだ。」
　血塗れの壁と狩猟笛、あの血だまりか。
「尻尾を鳴らすヘビがいるだろ？あの音を口で真似するような唸り声が…あぁ忘れねぇあの唸り声…」
　男は震えはじめた。
「空が人の形になった。光る黄色い眼の空だよ。赤い光の点と線がちらついた。最初にリーダーを狙った照準器だ。」
　照…準器…？
「俺達は撃ち始めた。ありったけの弾を全部撃ちこんだ。色んな方向に掃射したっ…でも手ごたえが無ぇ。」
「打ち続けたら女がやられた。でっかい手裏剣を飛ばす音が彼女の体ごと壁に刺さった。」

壁に何かが打ち込まれたような亀裂と亀裂を彩る血痕も見た。
「俺はとんでもない力で横から打ち飛ばされた。骨が何本もいったのはわかったよぁぁ痛ぇぇ」
「気が付くとリーダーが宙に浮いてたよ。足をバタバタして空を蹴っていた。あいつは空の化け物じゃなかった。聞いてるだろ？噂の森の化け物。あれがあいつだ。空でも森でもねぇ。あいつは透けているんだよ。空も木も壁も透けやがる。」
――透ける能力…オオナズチ？でも照準器ってさっき…
「鋼の長い爪が宙に現れて、リリリリリーダーが刺された。おおおれは間に合わなかった動けなかった…！ぁチクショウいでぇぇぇ。」
「あああああぁぁみんなやられた、やられちまった。あんなむごいことを…ヒッうぐっ…」
「せめて死体だけでも…止められ、指一本動かせなかった。ひどい、ひどいよ。」
男が震えながらすすり泣いている。男を挟むようにオトモ達がぴたと寄り添った。
すまねぇすまねぇと仲間に小さく謝り続ける男に仲間の遺体がどうなったのか聞くのは酷だと思い、彼が少し落ち着くまで私だけで遺体を探すことにした。
そこらかしこに飛び散った血飛沫を頼りに周囲を見回しながら逃れ者達の証言を反芻した。死体がどうとか…死体を…丁寧に――吊る。
テントを覆う遺跡の元に立ち天井を仰ぎ見たが何も無い。ではその上は。
翔蟲で二階に飛び乗ると――いた。逆さまに吊られた三人がいた。
遺体は血に染まっていた。あぁ何てことを。赤いのは皮を剥かれているからだった。腹を裂かれて内臓を引き出されているのがふたつ、ふたり。もうひとつ…もうひとりはうなじから背中に縦に切込みが入っていてそこから頭蓋骨と脊椎を抜き取られていた。
遺跡に登ってから私は見ているものを全て、写真を撮るべく私の指は事務的に動き続けていた。が、ぬめりのある湿った感触の何かを踏

んで足元を見た瞬間吐いた。血で濡れていない壁に手を付けて吐き続けた。辺りに充満する血の臭いに鼻が麻痺していたのと、異常な光景を見聞きするのが続いているせいだろうか、足元への注意が散漫になっていた。ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい。

私が踏んだのは裂かれた腹から垂れ落ちた人の内臓だった。時間をかけて胃の中身を全て吐き出し涙と鼻水と口のまわりを拭った私は深く、深く深呼吸をした。

「タイシ君、こっちに来なくて正解だったわ。」

わざとヘラヘラ笑ってみせてから翔蟲で更に壁を上り、どのような形に遺体を吊り下げているのかを記録した。遺体を括っていたのはハンターが崖を上るのに使っている植物のツルで、力任せとはいえ手先が器用なモンスターでは到底こしらえることができない結び目だった。またひとつ、私達の知るモンスターではないという確信が積み重ねられる。

地面に降りて遺跡を仰ぎ見ればなるほど見つけられないものではなかった。吊り下げるという行為を全く想定していなかっただけの、ただの見落としだった。私はどうやら単独の偵察に向いていないらしい。

討伐したモンスターの剥ぎ取りで切り開いた肉や内臓を見慣れている筈だった。モンスターに襲われ食い散らかされた人間の死体だって何度も見ている。自身の手で人を手にかけたこともある。でもこれは違う。まるで違う。

いささか乱暴だけど苦無を飛ばしてツルを切断して遺体を降ろすことにした。

狙いを定めて苦無を投げたがツルに当たらない。しがみついた崖から飛ぼうとするトビカガチにだって走るガルグの背に乗っていてでも苦無を当てられるのに。

呼吸と姿勢を整え、苦無を構え直して投げた。真下のテントの上に湿った質量のある塊が続けて落ちる。落ちる音を聞く都度、生き残りの男はヒィと声を上げる。

――ごめんなさい。あなたの友人達をこれ以上損なうつもりはな

かったのです。
テントを引き倒しながらテントの幕を力任せに引きずり、幕の上で遺体を離して並べてそれぞれを包めるようテントの幕を切り離した。それから近くに落ちている武器を拾い集めた。男は泣いている。
――とても辛いことを頼むのですが、どの武器がどの人のものか教えていただけますか？
男は鼻をすすり泣きながらえずきながら、武器と変わり果てた遺体を腕で指し示す。きっと皮を剥ぐ所も背骨一式を抜く所も見聞きしてしまったのだろう。酷なことを私はさせている。ヘヴィボウガンの持ち主は頭蓋骨と脊椎を抜き取られた遺体だった。ふいに頭の無い轟竜を思い出し男に彼がリーダーかと尋ねると頷いた。持ち去られた頭部はもしかして…戦利品？
クーラードリンクの効果はとっくに切れていたが凄惨な光景に嗅覚どころか皮膚感覚も麻痺していたようで、暑さを感じなくなっていた背中を寒気がぞくりと掴んだ。
遺体は首無し轟竜と同様に暑さで傷み始めていたので消臭玉をぶつけて自分が感じなくなった腐臭を祓う。アイテムボックスから引き出したありったけの流水草と霜降り草を貼り付けて泥玉コロガシと雪玉コロガシを添えて敷いている幕でそのまま包んだ。
持てるクーラードリンクに限りがあり活動可能時間を全て捜索に充てる為に採取は行わない予定だったけど、日陰の奥に隠れていた泥玉コロガシと雪玉コロガシだけは拾っておいて正解だったみたいだ。
手探りで遺体を処理する私を眺めながら男は再びポツリポツリと話し出した。
「遠い所から徐々に近づいてくるハンターを狩るハンターの噂は聞いていた。」
「だから俺達は武器を置いてハンターを休業するつもりだった。」
「せっかくだからお互いの故郷を訪ね回る旅にしようって年甲斐もなく盛り上がったよ。」
包んだ遺体にそれぞれの武器を括り付けて作業を終えた。
「武器が無くても四人で固まって逃げるのに徹すれば道中でも守りあ

える。」
「その為の防具の整備と路銀を稼ぐ為にあの依頼を受けたんだ。それがこんな…。」
　並んだ遺体に手を合わせた。
「リーダーを長い爪で刺し殺したあいつはそのまま姿を現した。」
「竜人族の男より大きくて見たことのない鋼の仮面を被っていたよ。太い腕に太い足、竜のように太い指と爪、ぶっとい筋肉の上に小手と脛宛て以外に碌な装甲をつけていなくて…竜みたいなトカゲみたいなヘビみたいな肌をしていやがった。」
　男を見た。
「あいつは俺が死んでいないのに気付いていた。気付いていたら俺も皮を剥がされてそこに並んでいたんだろう。一番強そうな奴の首が手に入ったから満足したのかも知れねぇ。首も動かせねぇ痛みでまぶたも閉じられなかった俺は仲間の遺体がむごい仕打ちを受けているのを止められなくて、目を逸らすことも出来なかった。」
「あいつが上にみんなを吊るした後いなくなってから、何故だかわかんねぇがテントの中に逃げた。真上にみみみみんなが吊るされている。気が狂いそうだのに痛みがそうさせてくれねぇ。」
「ぅ辺り一面血の海だ。いっそどこぞの竜や獣に喰われるのも期待した。」
「でもモンスターは現れなかった！どいつもこいつもあの悪魔に怯えて出てこない!!」
「砂原はもう奴の縄張りだ、他の狩り場もじきそうなる。狩り場の次は里だ。」
「見ただろう、あいつは喰う為に狩らない、素材の為に狩らない。守る為に狩らない。俺達とモンスターと道理が違うんだ。狩ることだけを楽しむだけ。」
「おおおおお前、カムラの里の『猛き炎』って呼ばれている強いハンターだろう。」
　突然男の意識が私に向いてまくし立て始めた。
「あいつは女子供は襲わない、だが古龍を倒せるお前は別だ！悪いこ

とは言わない今すぐハンターなんて辞めちまえ。武器を捨てて隠れろ。そっそうだ受付の、お前の許婚のウツシって男もだ、あいつが只者でもないのは俺でもわかる。あいつの首ももれなく狙われる！」
「早く逃げろ。悪いことは言わねぇ、二人で刃も里も何もかも捨てて逃げろ。番の戦利品なんざ趣味が悪りぃ。ハンターの人生なんざ忘れてくれ！」
「もう俺は武器を握れねぇ、きっとろくすっぽも体を動かせねぇ。」
「俺は嫌だ、ハンターももう嫌だ。かかっ顔見知りの奴があんな風に皮を剥かれるのも耐えらんねぇ。血の臭いも何もかも嫌だぁぁぁぁぁぁぁ。」
大の男がむせび泣いている。
動かせない腕に無理やり力を込めてアイルーとガルグを抱きしめて泣いている。
竜や獣と向き合う覚悟を持っていた人のいいハンターが心を折られて泣いている。
普段なら依頼を失敗すると台車に載せてぞんざいに運ぶアイルーの救助班に、ギルドからの依頼書を見せ丁寧に運ぶよう追加の報酬を払う。三人の遺体と、私のアイルーとガルグを力の入らない腕で離そうとせず泣き続ける生存者を里に連れて帰る為だ。オトモのいない丸腰の状態でひとり里に帰ることに不安は感じないわけでは無かったけど捜索と調査の結果、どうやら砂原にハンターを狩るハンターの気配は無い。里に流れ着いた逃れ者達による、一組分の狩りを終えるとより強き者を求めて狩り場を変えるという証言は本当のようだった。
――――だとしたら。
けれど、ティガレックスを切り裂きパーティーを血溜まりに変えた圧倒的強者が砂原を後にしても大型モンスター達は姿を現さなかった。
砂原のメインキャンプを出発してから虫や猟具生物を見掛けはした。けれども小型モンスターどころか水辺で泥浴びに勤しむボルボロスも、餌を求めてのしのし歩くアンジャナフも、長い舌をムチの様

に使ってハチミツ採りを邪魔するラングロトラも、女王の如く大空を舞い飛ぶリオレイアも、縄張り争いで昂ぶり泥と化した大地ごと空に昇るオロミドロもいなかった。砂原で見つけたのは重傷の生存者がひとり、凄惨という言葉で片付けるのも憚られる人間の遺体が三つ、足を切り落とされ頭を持ち去られたティガレックスの死体がひとつだけ。

大地を隆起させ起伏に富んだ地形を作り上げた大昔の地殻変動や、浸食によってより複雑な地形を作り上げた今は無き大河に想いを馳せ、赤い土の台地から台地へ大翔蟲を使い飛び渡るのが好きだった。ガルグの背に乗りヒトダマドリに接触しながら崖の縁をギリギリに駆けるのが好きだった。

ここはもう、ウツシ兄ちゃんを追い掛けるようにハンターを目指し、ウツシ教官に訓練で連れてこられ土地勘や猟具生物や採取のコツを学び叩き込まれた砂原ではない。ハンターとして独り立ちし、百竜夜行を凌ぐ傍らギルドの依頼や目当ての装備を作る為にモンスターと命懸けの大立ち回りを演じた砂原ではない。対の古龍を倒した後に赤い砂の台地と青白い岩陰と砂の地下洞を恋仲となったウツシさんと気ままに翔蟲で駆け回った砂原ではもうない。同じ景色であってもほんの数週間前の狩り場ともう違う。

何処から流れて着いたモンスターでもヒトでもない邪悪な闘争心に満ちたこの狩猟者を倒さないと、モンスター達とハンター達の命の営みを育んだ狩り場は戻らない。鼻の奥がツンとして目頭が熱くなったけど先ほどの一抹の不安が蘇り熱が冷めた。

――――だとしたら。

だとしたら他の狩り場が心配だ。水没林を調査する予定だったカムラの狼雷竜、ウツシ教官が危ない。

第四章　水没林の捕食者

これまで任務で狙った者や護衛に好敵手と見做され交戦になることがある。相手が求道者の様な武人だったり、敵を探しては相手との戦闘から己の強さを図りたい奴に見つかった場合は逆に執着され非常に面倒くさい。手合わせの勝利に戦利品の意味合いを被せてくるのである。こちらはサクッと仕留めて早く里に、早く愛しい愛弟子の元に帰りたいので、全力で返り討ちの返り討ちにして任務を終わらせたものだ。

そうしてウツシの目の前に景色の中から現れた者は、そういう面倒くさい手合いだった。

砂原の異変とパーティーの消息を調査捜索しに向かう愛弟子を早朝に見送ったウツシは、身長が伸び体と筋肉の成長が本格的に始まった弟子のタイシと水没林に哨戒に来た。水没林では急激な温度の上昇と小型モンスターが見えなくなったぐらいの異変であるが、未知の狩猟者は各地方でも水没林に現れる情報を得ている為である。

水没林の最奥の瀑布に近いサブキャンプから救難信号が飛んだ。

「ハンターが来てたのか？」

ウツシとタイシはサブキャンプの少し離れた所でガルグから降り、気配を消しカムラ特有の忍び装束に相応しく周囲に溶け込みながらキャンプ地に忍び寄った。

キャンプは静けさに包まれていた。人がいた気配はあるが争ったような形跡は見当たらない、が、ウツシよりまだ目線の低いタイシはテントを守り囲む岩壁にある小さな出入口の様な穴のひとつ、瀑布から遠い穴の周りの草に鮮やかな赤を見つける。岩壁の外側に続く赤は誰かを引きずった血の跡だった。

タイシは穴を抜けて血の跡を追う。最初にハンターが選ぶようなポーチが落ちていた。さらに辿ると血の付いた防具がぽつぽつと落ちている。跡は樹木の小さな茂みの向こうに続いているみたいだ。不安と緊張で胸が早鐘を打っていたタイシは目をつぶり時間をかけ

て呼吸と鼓動を落ち着けた。気配を消し茂みに手をかけそうっと緑を開いた。視線の先に温度と湿度をはらんだ赤い塊がふた山並んでいる。濃い血の匂いで鼻がバカになっていたタイシは座学で読んだ人体図鑑に載っている絵図を思い出し、目の前の塊に結び付けると吐いた。塊から目を背けても止まらない嘔吐を続けながら後ろに下がるタイシと入れ替わりウツシ教官が前に進む。

塊の上に赤いしずくが落ち続けていた。ウツシが上を向くと太く高い枝から腹と背を裂かれた臓物の持ち主の男ふたりが逆さにぶら下がっていた。

「…センパイがこっちに来なくて正解だったッスね。」

吐き気がおさまったタイシは口の周りを拭いながら、実は砂原で同様の物と対峙したばかりの姉弟子を気遣う。

ウツシは逆さ吊りの男達から視線を降ろしたら目に映る林に違和感を覚えた。巧みに気配を消しているようだが視線の様な意思のような気配なものがウツシに向いている。蛇が尾を鳴らした音を人が口真似したような唸り声が辺りに響く。

「ハンターを狩るハンターがカムラにお出ましだ。」

右側の茂みが揺れたと思ったら左前側から光弾が飛んできて命中した樹木を焼き貫いた。大型モンスターに見られるビーム攻撃にしては小さくまとまっており、威力の密度が桁違いだった。悠長に分析している暇は無く、直線的に光弾は発射位置を変えて次から次へとウツシに向かって飛んでくる。敵は移動しながら打ってくるようだ。

ウツシはウツシの周囲を派手に動き回りながら姿が見えない敵の攻撃を避け続ける。

「タイシ君、すぐ里に報せて！例のあいつが現れたことと、さっきの救難信号の顛末だ。できれば水没林を閉鎖させてもらってくれ！」

双剣を抜いたウツシは光弾の飛んでくる元にアタリを付けて切りかかる。

「タイシ君、急いで逃げるんだ。武器を持っていない子供の君なら今追い掛けられない筈だよっ！早く逃げて里に報せるんだ！」

ウツシは見えない敵との攻防によってタイシの姿を見失っていた

が、カムラの里で一番響く声量はタイシの耳にしっかり届いた。
「ウツシきょうかーん！最強の助っ人を呼んでくるッス！それまで踏ん張ってくださーい!!」
さっきまで嘔吐していたばかりのタイシは胃から食道と口に残る不快感をサクッと忘れてメインキャンプへと駆け出した。

―――

里長と同じかそれ以上の巨躯、筋肉は人と同じような付き方をしているが四肢ががっしりと太い。太ももは俺より太いのかそしてふくらはぎも足首もガッシリと太い。竜の足を持つ狩猟者はその健脚で木々や遺跡の高低差を軽々と駆け上がり、時々姿をくらましてはあらぬ方向から光弾や円盤状の手裏剣を飛ばしウツシを翻弄する。
ウツシも翔蟲で空中戦を挑むが、トカゲや鳥のように木々を移動しながら透過の能力を使われると次第に追い込まれていく。離れた所から光弾を撃ってきたかと思えば見えないままいきなり殴りつけてくるのだ。右腕の籠手のカギ爪は繰り出されると刃が透過されないので辛うじて避けることが出来たが敵の腕を振る速さも厄介で避けるだけでも消耗させられた。
また、双剣での攻撃は片手剣の盾よりかは多少小さい円盤状の手裏剣で防がれた。
しばらく闘いながら敵の観察をするうちに顔を鋼の大仮面で隠していること、光弾は防具の装置から発するエネルギー弾であること、そして透過する能力も装備に搭載された機能であることを把握した。背景に溶け込むオオナヅチは晴れて無罪放免となった。
ハンターを狩るハンターにいよいよ追い立てられ、エリアを移動していたら雷光虫をの光を集めるジンオウガに出くわす。ウツシは瞬時に鉄蟲糸で縛り狼雷竜に乗った。帯電した脚や尾の打撃が効いたのか狩猟者は距離を取った。好機と捉え咆哮で落雷を呼び寄せて雷の柱を狩猟者にぶつけたら稲光は狩猟者の体表を這いまわると右腕の籠手に集まり霧散した。
「雷が効かないの、か…？」
生まれつき雷の耐性が高く強さと闘い方を狼雷竜に例えられるウ

ツシにとって、雷を活かす闘いが封じられてしまった。ハンターを狩るハンターはウツシにとってとことん相性が悪い相手であった。

「あぁ本当に、面倒くさい。」

狼雷竜の唸り声の如き低い声でウツシは独りごちた。

狩猟者はジンオウガの肩や前足に例の光弾を撃ち始めた。肉を焼き穿つ痛みにジンオウガは体を崩し操竜を諦める。狼雷竜から飛び降りたら網が目の前に広がった。避けようと後ろに飛ぶが投網は装置により発射された勢いのままウツシに追い付き体に巻き付いた。投網は覆い被さるのに留まらず、しかと巻き付きウツシを絡め閉じ込める。

ハンターを狩るハンターに仮面越しに見下ろされる。狩猟者の隙を探そうと網ごしにウツシの金色の目は狩猟者の体躯を隅々までせわしく観察するが、大きな鋼の仮面を飾り立てるような硬めのドレッドヘアと三色のまだら紋様に彩られた爬虫類の如き肌とそれを覆う面積の少ない装甲…目に入るのは見た目の特徴だけで逆転できそうな要素が何かも判断できない。

ハンターを狩るハンターはウツシの筋力でもカムラの炎で鍛えられた双剣や苦無でもビクともしない鋼鉄の網を、容易く引き剥がした。

――ドスッ

起き上がろうと片膝ついたウツシの腹に重い蹴りがめり込み、ウツシは小石のように転がる。木の根と枝が絡まり崖と崖を繋ぐ橋を回る視界が目に入った。よそ見をすれば崖下の泥の水辺に落ちる木の根と枝の橋まで吹っ飛べたなら逃げることができたかも知れないが、残念ながらウツシの体はその手前で止まってしまう。

ハンターを狩るハンターはかつてない強者の戦利品を目前に満足げに歩み寄る。

小型モンスターが姿を見せなくなり小さな生き物も声を潜める水没林。

ウツシは枯草色の髪を掴まれ上体を起こされた。

ハンターに触れたヒトダマドリの囀り。ハンターの重さを乗せた

ガルグの駆ける足音。
「あれ、音だけ聞こえる走馬灯もあるのかな？」
膝立ちのウツシの耳にかつての水没林の喧騒が蘇る。
狩猟者の仮面越しの唸りに混ざりながら蘇る鳥の声。瞼の裏に浮かぶ愛しい愛弟子の笑顔。
「やっと祝言だったのになぁ…グゥッ」
狩猟者は空いた手でウツシの太い首を掴んだ。頭蓋骨を引き抜くべく指と黒い爪がミシッと首に食い込む。
「フウンダと　おモッて　アキラめナ。」
これまでに仕留めたと思われるハンターの声を組み合わせた声がウツシに観念しろと促す。不運、か。
子泣きキジが高らかに鳴く声。風に混じるエンエンクの匂い。大型モンスターの駆け回る足音。
「……?!」
ウツシの首に血がにじむほど食い込んでいた狩猟者の指が急に力の入った首の筋肉によって押し戻された。
「あーー、ハハッ…。俺、教官だよ？だから――」
筋肉に力と生気を戻すウツシを狩猟者は訝しむ。
「俺の弟子達も手強いぞッ……！」
マガイマガドの太い前足がウツシ諸共ハンターを狩るハンターに叩きつけられた。
「ウツシ教官!!」
水没林に現れない筈のマガイマガドの背に男物のリノプロ装備を着込んだ愛弟子が乗っている。愛弟子の後ろから年齢と体格に対して大きすぎるリノプロ装備を着たタイシが怨虎竜の背から降り、抱えていた二羽の子泣きキジと一匹のエンエンクを解き放った。
「教官、今のうちッス！」
ハンターを狩るハンターの死角に入ろうとタイシは怨虎竜の陰に隠れるべく師を引きずる。猛き焔は操竜を続けて狩猟者に怨虎竜の硬いウロコとしなやかで厚い筋肉に覆われた足や十字槍の尻尾をお見舞いさせ続けた。操竜により攻撃させられているようには見えな

いほど生き生きとした様相で、怨虎竜は右前足を叩きつけては左に薙ぎ払い、左前脚で受け止めたら右に薙ぎ払い、狩猟者が側に回り込もうとすると体を横に倒して巨体で押しつぶそうとする。

その動きは彼女の意思か、怨虎竜の意思か、あるいはふたりの――。

戦乙女の心を乗せたかのような猛攻撃を続ける怨虎竜はいよいよ興が乗ったのか鬼火を纏い始めた為、猛き焔は操竜を切り上げた。

怨虎竜の陰に隠れてタイシは背負っていたリノプロ装備一式を並べ師匠に着付けていく。ウツシは怨虎竜の渾身の一撃による最新の衝撃と激痛と引き換えに、あわや戦利品にされる運命を先送りできたことを怨虎竜にも礼を言うべきか逡巡する。

水没林に現れない筈のマガイマガドと成人男性のリノプロ装備を身に付けた弟子達、ウツシは何が起きているのかよくわからなくなっていた。ハンターを狩るハンターとの敗北寸前の交戦による消耗と負傷に加え、怨虎竜と戦乙女の強烈な一撃により一人では動けない状態のウツシは、里へ伝令の為に返した筈の幼い弟子が作戦を立てて強力過ぎる応援を呼んできたことだけを理解することにした。

操竜を切り上げた愛弟子は怨虎竜の背から翔蟲でウツシ教官とタイシの前に飛び降りた。師と弟弟子の腕を掴むと木の根と枝の橋に向かって飛び…興の乗った怨虎竜が周囲にまき灯した鬼火が大爆発した。

爆風で飛ばされた三人は橋の根のすき間から真下の泥の水辺に落ちる。

「ぼはぁ！」

三人は深くはない水辺から泥まみれの上体を水面から出した。

愛弟子は自分の兜を外しアイテムポーチを取り出すと、ウツシの兜を外す。古の秘薬を口に含み硬化薬グレートをあおった愛弟子は、おもむろに許婚の頬を掴むと唇を重ねて口移しで薬を飲み込ませた。

「待って待って愛弟子待って、荒いって。大丈夫だから、一人で飲み込めるから！」

今度は鬼人薬グレートをあおり、握り砕いたウチケシの実を流し込もうとするかわいい筈の許婚をウツシは制止した。

「ウツシさんが体を動かせないほど消耗しているなら…こうでもしないと薬を飲み込めないと思って…」
泥まみれの乙女はしどろもどろに弁解しながらウチケシの実と鬼人薬グレートを手渡す。タイシは大胆な方法を次から次へと繰り出しながら気弱にモジモジする姉弟子を見て、大人の女性ってマジわかんないッスね、と言うのをグッと飲み込んだ。
猛き焔の苛烈な応急処置によりウツシは水中で体を動かせる程度におおよそ回復したので、退避すべく全員リノプロの兜を被ると、頭上の木の根が立て続けに爆発した。
鬼火の爆発でも砕けない巨木の根や枝がバラバラと落ちてくる。落下物から身を守ろうと水面にしゃがんだら重量のある何かが水柱を高く上げて落ちてきた。
水柱が平らな泥水に還ると見えない何かが水面に波紋だけを作り三人に近付く。師弟達は泥水にかがんだまま息をひそめた。
水の波紋の真上に景色と空気がヒト型に浮かびあがっている。頭とおぼしき位置から目のような黄色い光が浮かびあがり、その近くから発せられる三点の赤い光線が巨木と泥の壁や水面を撫でるように師弟たちを探している。
ウツシは浮かび上がる眼光と目が合った…気がして体を強張らせたが、動く景色が作る水の波紋が方向を変え三人から静かに離れた。
「俺とわからなかったのか？いや俺達が見えないんだ…。」
ズドドドドドドドドドザァーン
轟音と共に濁流が流れ込んできた。
「今だっ！すぐキャンプに飛べ！」
濁流を流し込んだ張本人、オロミドロを操竜するリノプロ装備の奥からハネナガが叫んだ。
濁流に身をもまれながらどうにか掴み出したモドリ玉を上も下も泥もわからない状態でどこかに叩きつけた。
水没林のメインキャンプに薄緑をはらんだ白煙が四つ立ち上るとカムラの里守が四人現れた。
「ハネナガさん今までどこ行ってたッンスかー！」

タイシはハネナガに抗議する。
「武器を持っていたら獲物と見做されるって聞いたから、武器以外に俺達の武器になりそうなものを集めてたんだよ。どうせ採取のヒマなんて無かったろ？」
メインキャンプで体制を整えながら愛弟子は砂原の報告を、タイシは救出の経緯を説明した。
愛弟子は早朝に赴いた砂原の報告を里に送ったものの、不安と闘いの予感が治まらず韋駄天の速さでフズクズと同着で里に帰還した。生存者をゼンチ先生に引き渡し、収容した遺体と共に砂原での惨劇を報告していたらタイシの救難信号が届いた。
『救助者が狙われて全滅したくないから、武器は全て置いて来てほしい。救助者と教官の背丈や体格を誤魔化して撹乱したいから、教官を含めた男物のリノプロ装備を用意してほしい。』と、結果を振り返れば中々に的を得た内容だった。
タイシの救援要請に応じたのは愛弟子とハネナガの二人。愛弟子と自前のリノプロ装備を持っていたハネナガは、リノプロスの素材を里中からかき集め、二つの加工屋とオトモの加工屋総動員で最大まで強化した装備を超特急で三人分を用意させた。
そうして水没林に駆け付けタイシと合流するも、何と早々にハネナガとはぐれたのだった。
愛弟子はテントの中から愛刀の剣斧「禍ツ斧」を取り出す。
「センパイも何なんスか。武器は持ってくるなって言ったじゃないッスか！」
何だかんだでやりたい放題の先輩たちにタイシは呆れた。
「万が一、私達がハンターと、闘える者とバレて向かってきたら逃げるにしても結局武器は必要になるかと思って。あの場には持ってってないからいいじゃない。それに禍ツ斧がマガイマガドの縁を繋いでくれたみたいだし。」
「マガイマガドの操竜といい、薬の飲ませ方といい助け方が苛烈過ぎるよ。愛弟子。」
教官は先程から愛弟子に少しでも滋養を、と無理矢理こんがり魚を

食べさせられている。
「ウツシ教官は相手に腕の一本でもくれてやる覚悟で対峙したのでしょうけど、あいつが欲しいのは教官の背骨と頭蓋骨ですよ。もし私達の到着が少しでも遅かったら…。」
「センパイが行かず後家になる所だったッス。」
イガグリ坊主を卒業したてのタイシの頭を愛弟子が憎たらしげに叩こうとする。
「あいつの体の大きさからすると落とし穴は使えないかもな。それにジンオウガの雷撃が効かなかったからシビレ罠も効かないかもしれない。」
「え、そうなの？じゃあ雷毛コロガシは戻しちゃうね。ホレッ森へお帰り。」
「ハネナガ君のポーチにはオロミドロも入っちゃうんだね。あんな大胆な助け方、愛弟子かと思ったよ!!」
「ウツシさん諸共にぶっこんだマガイマガドには及ばないですよ。全部クグツチグモと偶然通りかかったオロミドロのおかげさ。」
ハンターを狩るハンターは砂原から水没林に狩り場を変えたばかりなのか、まだ大型モンスターを狩っておらず竜達が妙な気配を感じても砂原の大型モンスター達のように姿を隠すまでには至っていなかったらしい。砂原の地下はモンスター達で血の海になっているのかも知れない。狼雷竜・怨虎竜・泥翁竜と次々に会えたのはまさに幸運だった。
ハンターを狩るハンターはカムラの里にとって切迫した脅威なのだが、重要な戦力であるウツシを未知数の鉄火場の中で誰一人欠けること無く奪還できたのは僥倖である。多少は気を緩めた会話に乗せて各自は手早く身支度を整え里に帰る準備を進めていた。
里へ帰るべく全員が立ち上がるとメインキャンプの前の小川に薄緑をはらんだ見慣れた白煙が立ち上った。四人は互いの顔を見回し、たった今会話をしている者が今ここに戻ったのかと眩暈の伴いそうな思い違いをしかかった。
瞬間赤い光線が眼前をちらついたと思えば白い光弾がハネナガの

脚に当たった。蛇が尾を鳴らした音を人が口真似したような唸り声に、泥の斜面が透けている体。
白煙の中心、水面から上へと青白い火花が人の形をなぞるように走っている。
次に光弾を受けたのはタイシの肩だった。本来ならば肩が胸部ごと吹き飛んでいたかも知れないが、光弾は修行中の成人男性より二周り以上小さいタイシの肩をかすり軽い火傷を負わせるに済んだ。
光弾がキャンプに据え置いているアイテムボックスとテントを破壊した。なるほど二度と補給と休憩はさせないってわけだ。自分の装備の上から無理矢理リノプロ装備を被せられているウツシは次の手を考える。
「伏せて！」愛弟子の声が閃光弾と共に弾けるとガキィンッ！と金属がぶつかる音が響いた。愛弟子が剣斧で仕掛けたのだ。
小川の中で一撃、転がっては離れ、突き。見えない相手に合計二撃。
ハネナガがありったけの生肉を愛弟子に向かって投げつけた。浅い小川までも遡上していた大量のギガニアがいくつも水柱を上げ生肉もろとも小川の生き物に食いついた。乱射される光弾、負傷した脚で転がり避けるハネナガ、回復したばかりの教官を庇い突き飛ばすタイシ、小川の上空から鉄蟲糸に掴まりぶら下がる猛き焔。
ギガニアの狂乱が収まり愛弟子が着地する。小川の透明な人型は青白い火花をさらに弾けさせると、背景の泥の土手を透過しなくなり大仮面の狩猟者が浮かび上がった。
右手に鋼の細槍、左手には水没林で狩られたハンターのポーチを持っている。世界中そこら彼処のハンターとやり合い、狩りの合間にハンター達の立ち回りを沢山見てきた筈で、モドリ玉を使う者も何人かいたことは想像に難くない。
仮面の狩猟者は左腕の籠手に触れたがその体は斑に透けようとするばかりで完全な透過が出来なくなったらしい。鬼火を纏った剣斧を愛弟子が振りかぶったら鋼の槍がさらに延びて愛弟子を払い飛ばした。ウツシは勇猛な許嫁に手を伸ばしたが投擲された槍に翔蟲を邪魔されてしまった。

「フウンダと　おモッて　アキラめナ。」
小川から上がった仮面の狩猟者は籠手の装置に触れながら、全く同じ装備で体格も揃えて判別がつかない筈のウツシに話し掛ける。
ウツシを庇ったタイシ、環境を利用して邪魔をしたハネナガ、ウツシから気を逸らさんとマガイマガドに乗り今度は同じ鬼火を纏った剣斧で攻撃してきた猛き焔。絶対にウツシを生きて返す意志の元に皆が取った行動が直前までの一騎打ちの中でウツシの立ち回りを覚えた狩猟者に正解を与えてしまった。
「タイシ君はよく考えたよ。モンスターやハンターと全く違う道理で動いているってのを信じ込み過ぎた。あいつがモドリ玉を使って追い付くなんて誰も考えつかなかっただけ。」
猛き焔は男物のリノプロ装備を脱ぎ始める。ガシャンと防具が落ちる音と共に紺藍に染まるカムラノ装が現れた。
「それに新品で強化したての装備のおかげでみんな生きているわ。タイシ君、よくやったよ。…だけど、私の引退はっ！まだまだ先だっからねっ!!」
リノプロメイルを力任せに仮面の狩猟者に投げつけると愛弟子は金剛連斧で斬りかかった。命を狙われている筈のウツシは翔蟲の光と剣筋を走らせて敵に突っ込んでいく戦乙女に見とれてしまった。
「教官しっかりするっす!!祝言の前に夫婦セットで頭と背骨を取られちゃっていいんスかっ？」
タイシは生意気盛りだった頃の姉弟子に放ったセリフを根に持たれていたことに肝を冷やしながら、誤魔化すように教官を立ち上がらせた。
リノプロ装備で姿を攪乱する作戦は意味をなさなくなった。バラバラに駆けながら方々から仮面の狩猟者に脱ぎだした装備を次々と投げつける。足を負傷したハネナガはガルグに騎乗している。
なんと荒唐無稽で笑い話の様な戦闘だろう。しかし透過の能力を失ったとは言え敵は圧倒的な膂力と戦闘技術を持ったハンター。伸縮する槍と円形の手裏剣以外に未知の手を隠している可能性もある。時にはクナイや石を交えて投げては相手が攻撃に専念できないよう

投擲を続け、里守達は水没林の出口ににじり寄った。
槍を手放した狩猟者は円盤状の手裏剣を掴むと片手剣の盾の如く愛弟子の剣戟を防ぐ。
剣戟と投擲の乱戦の中、仮面の狩猟者はウツシに顔を向けた――瞬間――狩猟者の左肩から光弾が飛び、避けたウツシの足元を掠めた。
光弾の衝撃で里守達の猛攻が止まった一瞬に仮面の狩猟者は己が先刻投げた槍を掴んだ。掴んだ槍を薙ぎ払う様に大きく振り回して地面に突き刺すと狩猟者は重心を腰に落とし仮面越しから高らかに咆哮を上げた。
ビリビリと肌に響く絶叫に足が止まる。誰も彼も肩を上下に呼吸していた。どうにか間合いを保つべく足元はジリジリ力を入れながら呼吸を整えて逆上せた頭を冷やす。
度重なる攻撃を浴びても仮面の狩猟者は傷を負っていないと思っていた。堅牢な表皮を持つが故に少ない装甲の防具だと。
どんな厚い表皮の竜の体にも獰猛に噛み付いては噛み千切るギガニアの狂乱をまともに浴びたのにこいつが無傷であるはずがない。現に私が上から着ていたリノプロ装備もボロボロになった。猛き焔は落ち着いて蛇のようなトカゲのような斑紋を纏った体に目を凝らす。
ギガニアの噛み痕は無数にあった。そして噛み痕や剣斧の傷痕から蛍光色に光る緑色の液体が流れているのを見つけた。
傷口に着いた液体、あの緑の液体があいつの血液…？赤じゃないのか。
剣斧を構え直した愛弟子は自信を込めて言い放った。
「血が出るなら殺せる。」

終章　カムラの対の竜

ハンターを狩るハンターは、これまで手合わせた中で最も強く手応えを感じたウツシを守り剣を振るった猛き焔を同格のツワモノと認め、番の戦利品とすべく水没林から退避しようとするウツシと愛弟子に食い下がる。

翡葉の砦に誘い込めばカムラの里に直接犠牲を出さずに戦えるだろうと考えたが、水没林の位置から砦に行くにはどう向かっても里を通らねばならない。師弟はただ逃げることが出来ず、道中を走りながら狩猟者と闘う羽目になった。

水没林から走り始めて道半ば、自在に伸縮しては間合いを変える厄介な槍を叩き落とすことには成功したものの、愛弟子の鬼火の剣斧とウツシの雷の双剣は砥石で研ぐ時間を与えられず、また敵の拳や鋼の手裏剣の刃を受け続けて刃がこぼれ剣としては使い物にならなくなっていった。

双剣はもはや柄しか残っておらずウツシの攻撃は柄頭で殴る打撃に、愛弟子の剣斧は光弾を弾いたり重厚な打撃を剣斧で受け続けて斧にも剣にも変形できず抜刀できずもはや鬼火を纏う盾の如き扱いだった。

「…ハモンさんに怒られちゃうなぁ。」

一足先に水没林からガルグに乗って帰還したタイシとハネナガはウツシ教官の救出に成功したこと、メインキャンプに戻ったが敵も狩ったハンターの手荷物からモドリ玉を使ってキャンプに現れたこと、透過する能力は敵の装備した装置によるものであること、敵は大きな鋼の仮面を被ったヒト型の異形であること、敵を足止めするべく闘いながらカムラの里に向かっていることを報告した。

そして今、カムラの里の大門の先、橋の上には傘屋のヒナミが閉門の令を待ち、二歩後ろにフゲンとゴコクが並び、ヒノト・ミノト、アヤメ、ハナモリが武器握り、門の外でもつれ合いながらカムラの大門に接近してくる三者の闘いを固唾を飲んで見守る。

愛弟子が仮面の狩猟者を通り越してウツシの手に翔蟲を飛ばし鉄

蟲糸を絡めるとウツシは愛弟子の手に鉄蟲糸を絡める。二人は狩猟者を挟んだ状態で左右対称に腕を上げれば体を反転させ、時には狩猟者を軸にして鉄蟲糸を巻き付けながらお互いの位置を入れ替え、また時には足払いを交えながら三日月蹴りを繰り出して何とか狩猟者を足止めせんと奮闘奮戦していた。

それは一糸乱れぬ呼吸と青い糸で紡ぐあやとりの如き舞いだった。

黒い瞳と金色の瞳を合わせれば次の振りへと同じ腕が動く。

それは翔蟲の扱いを極め鉄蟲糸技として確立し、また己が狩猟者と里守としての研鑽の結果を全て弟子に注ぎ込んだ師と、狩猟と闘いの立ち回りと翔蟲の扱いを幼き頃より師にイチから徹底的に叩き込まれた愛弟子による「師弟の写し鏡の如き」舞だった。

それはもはや家族と変わらぬ年月を重ねた師弟の絆に重ねるように恋慕の情を共に抱き、互いに番として求めんとする激しき求愛の舞だった。

得物は刃を失いもはや鈍器とも言えぬ有り様で手放すことになり、手持ちのアイテムは使い果たし、相手を縛らんと翔蟲を幾度も繰り出し舞っては鋼の手裏剣で鉄蟲糸を斬られ、翔蟲もいよいよ息絶え絶えの有り様で、残すところ頼りにできるのは己の肉体のみ。

出来ることなら仮面の狩猟者を里に着く前には倒したかった。せめて里に着く前に縛り付けるなり足止めを…と考えていたが頑強な体を持つ狩猟者は走りに重さを見せながらも師弟以上の元気を残しているらしい。

「里長より一回りぐらい大きいだけで厄介な膂力と脚力にスタミナなんて反則じゃないか！ジンオウガとマガイマガドともやりあってるんだぞ?!」

ウツシは半ば呆れるように叫ぶ。

狩猟者を置いて逃げきるつもりだったのに振り切ることも足止めも叶わず、里の大門に目と鼻の先という所まで三者は来てしまい、番は災厄を里へ連れてきてしまった結果を激しく悔いた。

橋の上の里守達は入り込む余地の無い三者の闘いにどのような手を打つべきか決めあぐねていた。ヒノエは弓に矢をつがえた。ミノ

トは姉より一歩前に出て大槍を握り盾を構える。
フゲンは消耗を見て取れる師弟に生命の粉塵を投げ込み回復を支援しようと考える…が、もし。もし万が一、ヒト型である敵にも粉塵が効いてしまったらここまで粘り相手を削った師弟の闘いを振り出しに戻しかねないことを危惧した。
猛き焔はにじりにじりと間合いを保つように後退りしながら大門を通り、仮面の狩猟者はそれを追い門に足を踏み入れた。ウツシは瞬時に狩猟者の後ろに回り込むとその背にしがみつき、装備に縫い込まれている飾りのクナイで狩猟者の肩や首の装甲のすき間をグサグサと刺し穿つ。狩猟者は禍々しい笛の音の様な叫びを上げると背の荷物を振り落とさんと、ありったけの力で体をねじり腕を振り回すと右腕で背後のウツシの肩口を掴み、後ろから前へと叩きつけた。
「ぐぁっ…はぁっ…っうぐぅ」
「ウツシ教官!」
狩猟者との間合いを保っていた猛き焔は愛しき師に一瞥もくれず狩猟者に駆け出し、愛しき師を地に叩き付けた手を捕まえると地を蹴り体を浮かせ脚を狩猟者の腕と肩に絡み付けた。
橋からは対人格闘術的に関節技を極め腕を折るつもりかと見たがそこは猛き焔、やることが苛烈で大胆だった。敵の頭部、つまり己の足先に向かって火玉コロガシとボムガスガエルを叩き付けたのである。
「ハハッ…!これが、カムラのハンターの闘い、だよ…」
自分の足元を爆発しておきながら、二匹分の提灯オバケムシの恩恵によって火傷一つ追わず橋の欄干の親柱まで吹き飛んだ猛き焔は転がったままハネナガから抜き取った猟具生物カゴを掲げた。
「さすが愛弟子!そんな虎の子を隠していたとは…。でも体を使い捨てる様な無茶な立ち回りを教えた覚え…は、無い…よ?」
ウツシは言い終わる前に眼前の爆煙と周りの違和感に気付くや否や、狼雷竜の如く地に伏せて構えた。
――まだ立っていられるのか。
光弾を発射する装置ごと肩を半分爆発で抉られた狩猟者はそれで

も立ち続けていた。そして力任せに鋼の仮面を自ら剥ぎ取るとあらゆるモンスターと人間の声を束ねたような咆哮を上げた。
仮面の下の、ハンターを狩るハンターの顔は異質という言葉で片付けられないものだった。
広く張り出した額に対して黒く縁取られ奥まった眼窩と白い眼、人なら鼻のある位置から下半分は四本の大きな牙に囲まれた二重の口があった。一見すると蟹の腹のような、または巨大な角と下顎の牙四本に囲まれたディアブロスの頭を小さく圧縮したような…と形容できたかも知れない。上の歯には犬歯の牙が二本と下の歯は尖った門歯が四本並びんだ内側の口を、四隅の大きな牙によって閉じることが無さそうな顎のような口が囲っていた。
呼吸をする胸が前後する様に外側の顎の牙が微かに内に外に揺れる。
仮面の狩猟者を食い止め倒すことのみを考え、長い時間対峙している内に仮面の下の素顔を全く考えていなかったカムラの対の竜達は予想外の相貌に仰天した。
「なんと、醜い顔なんだ…。」
橋の上から仁王立ちで攻防を見守っていたフゲンは言葉を漏らす。
仮面を捨て握っていた丸い手裏剣も放り投げた狩猟者は、天を仰ぎながらより大きな雄叫びを上げきると落ち着きを取り戻し、光弾の砲撃装置ごと吹き飛ばされた肩のわずかしか上げられぬ腕をどうにか動かして左側の籠手に手を重ねる。
「ツガイ　の　ツハモノよ　よク　ここまデ…」
自在に伸縮する槍も、自動で主の元に帰る手裏剣も、あらゆるものを焼き穿った光弾を放つ装置も全て失い捨てた狩猟者は、左籠手の装置に触れてこれまで狩ったハンターの声をつぎはぎに組合せた音声で番の竜に話しかけた。
籠手の側面が蓋のようにパタッと起き上がると狩猟者は震える指で籠手に収まっている小さな操作盤をいくつか押す。
「グックックック…、ハッ…ハッハッハッハッハッハッハッハッ…」
これまで狩ったハンターを束ねた音声と自身の発声器官の音を重

ね合わせた笑い声で狩猟者は笑い始めた。讃えるような、嘲笑うような、諦めるような、勝ち誇るような高笑い――にピッピッと規則正しい無機質な音が重なりだす。

籠手の装置には無数の赤い点が並んだマス目が四つ並んでおり、ピッと鳴る度に赤い点が消えていく。初めのマス目の点が全て消えると音と共に隣のマス目の赤い点が消え始めた。

音と共に消える点が示すのは時間か。とすれば一分あるか無いかだ。数多のハンターを狩り続けてなお戦利品として狙った俺と愛弟子に瀕死の深手を負ったこいつの狙いは――。

思考を反射させたウツシは後ろ手に翔蟲を繰り返し傘屋まで飛び下がると一際大きな傘を掴み、瞬く間に空いている手から全ての翔蟲を狩猟者に向けて雷の如く飛び込む。

狼雷竜の如き咆哮をあげながら傘を振りかぶったウツシは、ありったけの力を全身に込めて最後のマス目の点が僅かに残る籠手に傘を叩き付けた。後ろに飛び下がりながらも跳弾のように雷の速さで眼前の敵に突っ込む対の背中を見失わなかった猛き焔は翔蟲で師に追い付くと、師の背中からそれを抜き取った。

「ハ　ン　ター　をぉぉぉっ　なぁー　めー　るー　な　ああぁアアアアアアアッ」

怨虎竜の如き咆哮を重ねて叫んだ猛き焔は狩猟者の腹に両刃のナイフを突き立てた。

未知の生物の臓物の作りなど知ったものか。

戦乙女は黒い瞳に鬼火を揺らし咆哮を続けながら、腹の中にある筈の臓物を少しでも傷つけんと柄を握る手に重力と力を籠めて、ナイフを揺らしながら奥に奥に踏み込む。

駆け出しだろうが手練れだろうがどこの国のハンター誰しも皆が肌身離さず持ち歩く剥ぎ取りの道具に狩猟者は腹を貫かれた。ブルファンゴの毛皮だろうが古龍の骨髄だろうが硬い鱗を裂き肉と骨を断ち切って素材を剥ぎ取るハンター業の象徴といえる道具は、難なくハンターを狩るハンターの強靭な筋肉を破り内臓と血管を切断していく。

狩猟者は徐々に小さくなる断末魔と共に黄緑色の光る血液を異形の口から溢れさせ、ゆっくりと白い眼を閉じた。
籠手の時限式装置を腕ごと叩き潰したウツシは、拝借した傘の大剣から手を離すと立ち上がる。絶命を示す吐血を頭に浴びてもナイフを握る手を緩めない戦乙女の隣に立ち、彼女の背に腕を回すと肩を抱き寄せた。柄を握る許嫁の手の上に空いた手を重ねたら片足を上げゆっくり蹴るように狩猟者の骸を押した。
「…っはぁ、はぁ…はぁー…」
軽くなったナイフの感触と手に重なる愛しい男の暖かさを感じながら戦乙女は闘いが終わったことを悟る。師のナイフを共に掴んだまま向き合い、顔を寄せて額を重ねた。
「よくやったよ、愛弟子。」
「これで一緒に里に帰れますね。」
愛弟子は額を離して少し寂しそうに続ける。
「でもまたこの身と里を血で汚してしまいました。またしばらく花嫁になれなくなっちゃいますね…。」
「一緒に戦って一緒に汚れたんだ。君は俺を、そして一緒にハンター達を守ったんだよ。こんなに喜ばしいことが他にあるかい？」
ウツシは俯く頬に手を添えて花嫁の顔を覗き込んだ。
「君は僕の全て、誇りだよ。」
「教官と共に戦えて良かった。ウツシさんを守れて良かった。」
ハンターを狩るハンターの亡骸を前にし、数か月に及んだ異常事態の元凶に打ち勝った実感と骨の髄まで食い込んだ緊張感がほどけていく。
「対よ、対よ。鬼火を纏いし君を今宵迎えん。」
「対よ、対よ。祝言の予定を守らせるどころかこのまま続けて里の医師と一戦交えるおつもりですか？」
対の狼雷竜はそもそも水没林の闘いで背骨を生きたまま抜き取られる直前の深手を負っており、対の怨虎竜が施した苛烈な応急処置によってどうにか続行できた戦闘だった。本来であれば重症であるはずのウツシをゼンチ先生が見逃す筈が無い。二人はかつて退けた対

の古龍の対話をなぞらえてコロコロと笑う。
「対よ対よ、祝言の後は剣斧の扱い方と今一度、片手剣か盾斧の会得と…対人格闘をおさらいしてみようか！」
「教官それまだ続けるんですか？祝言の祝詞がハモンさんの説教になるかも知れませんよ？お互いに武器がひどい有様です。」
「ヒナミさんにもお礼を言おうね。お祝いの傘を先に貰っちゃったから。」
　得物を柄まで使い潰し、ハンターの知識を総動員して使えるアイテムや環境生物を使い切り、忍び装束に縫い付けられている装飾品すら千切り握っては振るい、瀕死寸前まで酷使した翔蟲と己の肉体をぶつけて戦ったカムラの竜の番は力の入りきらない足で里に向きを変え、互いに肩を抱きかかえながら橋を渡り始める。
　可憐な乙女と美丈夫と謳われながら全身を泥土と狩猟者の黄緑色の血で汚し尽くし、激戦の疲労で目の下に現れる隈や顔への打撃で浮かび上がる青あざと腫れや拭いきれなかった鼻血も切れた唇も全て、最強の師弟でもある恋人達の勲章だった。
　フゲンはズタボロの二人を胸で抱きとめると両腕で力強く抱きしめ、目尻に涙を浮かべながらカムラの空を仰ぎ『気焔万丈っ!!』と叫んだ。
―完―